

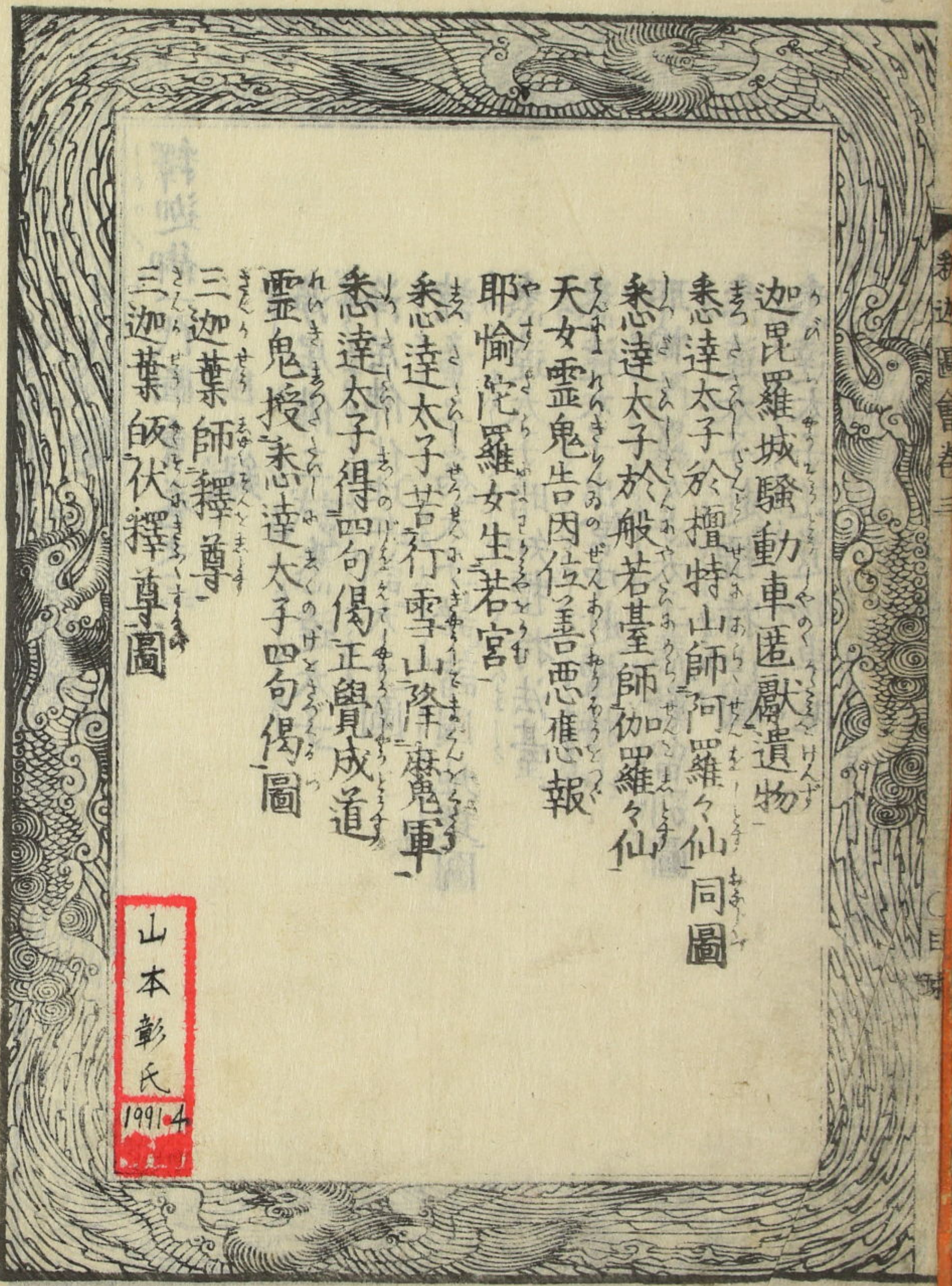


釋迦御一代記圖會

三

~13
4292
03





迦毘羅城騷動車匿獻遺物

悉達太子於檀特山師阿羅々仙同圖

悉達太子於般若臺師伽羅々仙

天女靈鬼告因位善惡應報

耶愉陀羅女生若宮

悉達太子苦行雪山降魔軍

靈鬼授悉達太子四句偈圖

三迦葉師釋尊

三迦葉飯伏釋尊圖

山本彰氏
1991.4



釋迦御一代圖會卷之三

淨居佛三試悉達太子

浪華好花堂野亭考選

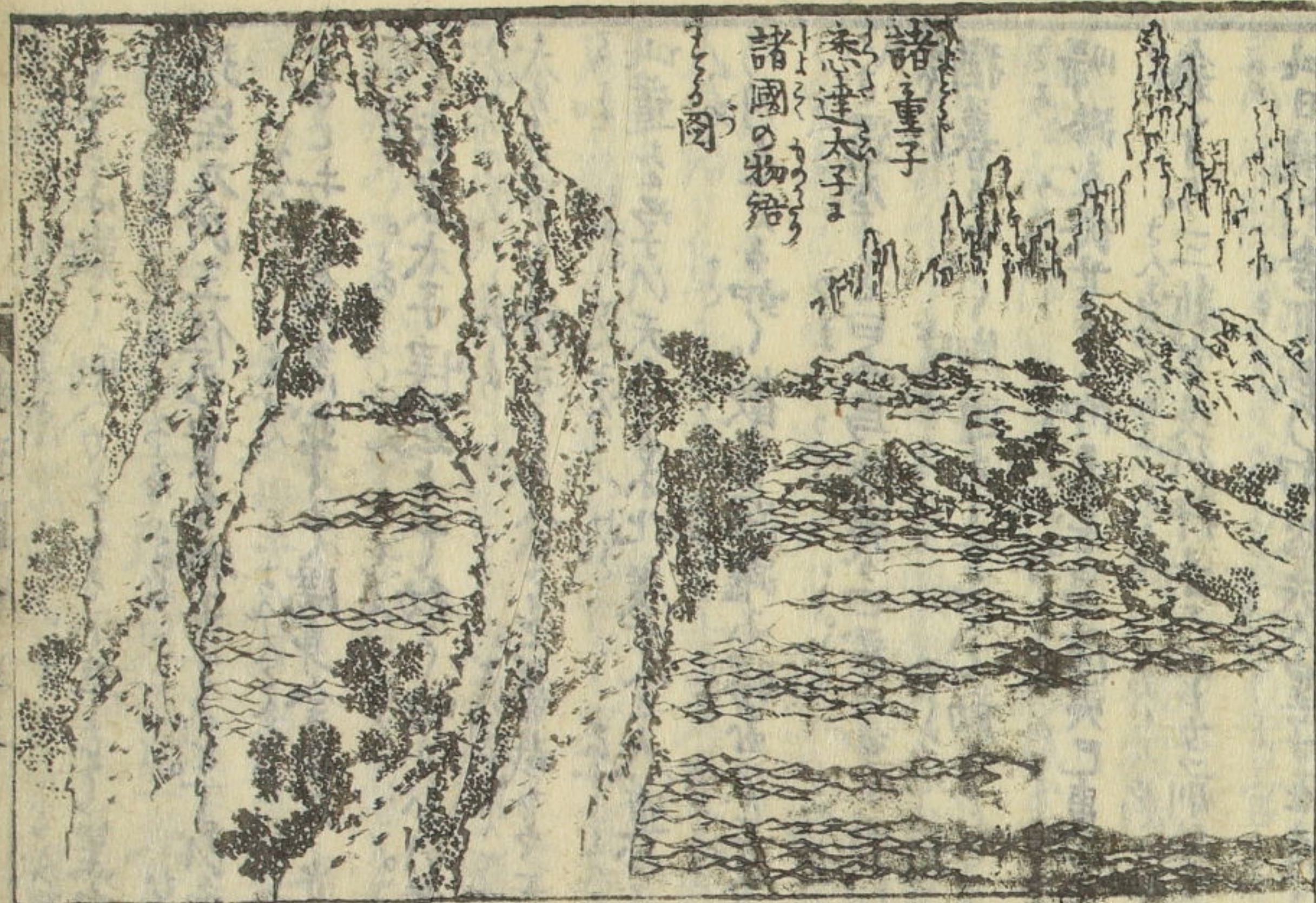
伽夷衛國王乃愛女耶輸陀羅女悉達太子乃新宮小備りく後ハ鹿野瞿陀孫
 乃西女と俱不三妃太子乃左右を片因由去れ給縁竹を綯を歌舞を奏し只官太
 子ハ脚心を慰むるとりも曾て関門ハ入らざれむ三新宮ハ由小控を失ハ高堂子の
 花をながむる心地ハ又ハ小橋曇痛夫人ハ浄飯王の内意を結耶愉陀羅女婚姻
 乃後ハ治定枕席を交むらりと目ハ新宮小仕女官を巨ハ向ハ合ハいも枕席
 を俱ハ去むハ一体ハえおむると中ハ夫人心を困ハ以潜ハ耶愉陀羅女以下三新宮と
 招く仰々ハ抑太子の脚更何ハ名宿因ハ然ハむろハ只富貴歡樂を欲ハむら
 此後心修行乃ハそハた事ハたハ好ハ大王余ハ小皇子ハそハ不在ハ只此事を憂ハむハ
 若宮中を潜出ハ事ハやハ城ハ四門ハ閉閉ハ音ハ里ハ向ハ小音中ハ小造設ハ直
 夜三千人ハ守衛ハ監卒を置ハ宮内ハ容貌風姿勝ハ姝女童女二千ハ

を侍り且晋く諸國を尋すとも。御身等三人乃新宮を備ふ。何卒出家字
道乃念を新王位を受禪か入事を欲しむ。然も三人も太子の御意と慰
出離の思を断轉輸王乃位を踏あす。計ひよ。社貞操とも孝行とも。夫
女乃身小三乃息あり。弟一乃嫉妬乃息なり。電を争ひ愛を貪る心より自然不
良乃心生。嗔恚の焰小胸の鏡を曇せ。君乃護を怠る。是乃弟一乃慎みなり
二乃慢心乃怠かり。君乃覺て。人乃尊敬重れ。自然心憐り。其色外小頭るれ
むろり人乃妬を清善事云。慈され。惡事見露され。終言重りて。却く君乃疎
を猜心。屈して息を生む。三乃睡眠乃怠かり。終日乃動仕。心倦た。夜不覺熟
寐。君乃湯を怠かり。此三事を能く慎む。何卒君乃御意を練。若宮の出来
させ。あすう計ひ。下と。教列い。い。三乃妃小骨身小徹り。忘る。感涙
小袖をひ。慎み。領堂。是より三新宮互。妬を恨む。心を慎む。相助て。太子小奉仕
只顧出塵の御望を断し。も。人を針も。然も。彼淨居佛。先小老病死の三苦

を以て太子乃道心を厲し。今三人乃新宮心を結。太子乃春情を結。を
天眼通。太子と。三乃色香。され。道心。忘り。か。疑ひ。神通を以
て。太子乃心小出遊。世人妻を思ひ。む。是。依。太子。野。外。出。遊。多。く。思。召
鳥將軍を召れ。丸久。宮中。不在。稍。氣。爵。を生。せ。り。依。郊。外。小。遊。人。多。思
り。御。然。乃。又。大王。小。奏。て。勅。符。を。願。ふ。と。命。ト。鳥。將。軍。奉。り。王。宮。へ。奈
り。太子。外。遊。乃。御。望。有。り。然。奏。ま。る。小。淨。飯。王。曰。先。小。太子。乃。意。を。慰。人。多
外。遊。を。勸。小。老。者。病。者。死。者。有。り。却。く。太子。乃。心。を。憂。へ。たり。是。何。者。乃
障碍。なる。妻。を。と。ら。む。其。ハ。本。身。之。朕。ハ。只。太子。乃。出家。学。道。せ。入。妻。を。怕。り。あり
然。も。小。多。く。太子。乃。外。遊。せ。ん。と。思。を。遮。り。傳。る。小。忍。み。と。汝。眺。望。上。野。外。小。行
宮。を。造。り。太子。を。伴。ひ。官。人。本。と。俱。小。守。護。一。猶。五。十。里。乃。外。東。西。南。北。一。千
入。之。乃。林。兵。を。置。く。其。不。虞。小。備。へ。り。太子。國。を。潛。出。入。と。せ。不。慮。り。田。一。先。小
且。外。官。小。命。と。く。道。路。を。灑。掃。一。老。病。死。ハ。小。更。かり。臭。穢。不。淨。乃。者。を。ハ。在

しる東の... 今般太子の心を憂へむる者を置か。決して刑戮を免さし
嚴小令し、又鳥將軍慎み、宣旨を奉り退去して月景城を圍り、太子小湯に
勅許乃ちむむたを言上し、百子小命とて城北に眺望し、死所を行宮を建
小不日小して造管成就し、これを御遊乃級残る方かくた。城外五十里四方小五の
禁兵を屯せし、不意の備をたし。準備十分綱を其旨、太子小啓白し、是小
依る悉達太子鳥陀夷をふらと。重男童女を將し、月景城を出む、此般
八寮乃御馬小召せ、城乃北門より郊外乃行宮とて歩せむ、三新宮、後宮
嫁女を從車小乗し、隨逐ある鳥將軍、教導とて先小進、新小宮、行宮
小結入り、酒宴を催し、妓樂を奏して慰進し、せり、太子小逸樂を好む、むがれ
女時あり、鳥陀夷以下十余人を從へ、野徑を逍遙し、遠道を眺望し、むがれ
一大樹、繁茂し、其下小平博なる石有る。青苔緑の漚を布く、如く、太子
甚る愛し、むがれ鳥陀夷亦を顧み、曰く、汝達ハ此所小待よ、九八彼石上小憩て、風

景を既なりと、唯入寛ふ、歩み彼樹下石上小端坐し、心淨小思ひ、とて却坐
と、其河浄居佛化して一人乃比丘とて、雞髪して法服を着し、右手ト錫杖を
策左手小鉄鉢を把り、来る鳥陀夷以下の者ハ瞬め、せと太子の動止を守れと
曾て此比丘を見る事、唯太子の御目小なり、向て曰く、汝ハ是何者、浄居
佛各て曰く、貧道ハ是比丘なり、太子曰く、何故、比丘とて、や答て曰く、能又子夫婦乃愛者
を新輪廻を離る、是を比丘と縋り、太子亦向む、何故愛者を捨輪廻を断
答て曰く、一切衆生皆五濁の爲、小身を汚し、六欲の爲、小心を惑ひ、老病并の迅速
なる事を悟む、生死乃苦、思小沉淪して、無上菩提の快樂有る、或不知我、修業を
不所、如た、色聲香味觸法小執着せし、無漏聖道小心を遊し、遠く、八苦の海と
過解脱乃岸、不着、無爲の都小到るなり、それ王侯貴人より、以下一切衆生、乃世小在
く、壁、一乃井裡小陥り、羊途小僅乃、小草有、小取着下、及臨、主母、竜、及張て
墮た、吞、心、勢、を、上、を、望、を、惡、虎、牙、を、怒、く、上、を、喰、人、を、待、を、上、を、難



諸皇子
志達太子
諸國の物筈



志達太子
無常と云
浄居佛
比丘化

新編圖會卷三

く下ふ難く(刺)カと云ふ小草を黒白の胤来て其根を食か如くがれん喜子
珍密及び王位乃貴も持ふこと。一は無常乃の風小遭も悉く解る人嚙呼危れ
るもちうもれ急をて満身金色の光を放ち端嚴妙相の佛と化し虚空に騰り
去る太子愕然として幼く悟りかひ借緒天候比丘の姿に化し出家功徳の貴
大なる事を現示しゆふこと。善哉々々天人の中唯無上菩提の道勝まり。九世
此道を學び天人も化度せん大道心候決定。胸の雲霧亦霽く新小真如
の月を足る如く。歡喜踊躍小勝むと鳥陀夷を近く召さる今只甚く樂しき
いと還すと曰ふ鳥陀夷白君も此行宮へ入せむいま平日然も過しむと希ハ
猶暮るもく脚遊あをむと勸まれば太子頭を振おひ否樂ハ極をうも。早く
帰路を促せし仰るを鳥陀夷已更を得む鳥將軍小其旨を告太子を宮軍小
兼も三新宮及び許妻の宮女前後を圍繞し終小月景城還幸なり。浄飯
此日破利舍耶城乃好容夫人皇子を産み是を後小難陀太子と申すなり。浄飯

王乃御教ハりも更方り。滿朝乃百官より未々民間に萬世を唱て祈りたり
悉達太子暗知擅特法臺

難陀太子降誕依て。王宮賑ひかへも。独悉達太子の。郊外小於く比丘の説
を學ぶより。愈出塵厭離の念崑崙の嶺よりも高。如何もて宮中飛潛出
かへし思召し。那里小到てう我心の師を得なれと思煩む。恥し心著む。誠や
人の絡り草中。十人絡り十里乃吏を知り。臣下乃息男の中小才智者との
成呼聚四方の吏を絡せし。自ら自是我心の師の在所を知り。あらしき
橋曇彌の御許(使)をまれ丸此頃頻小心符。絲竹乃音を中を頼み。何事
緒卿の子息の中。才智ある者を數人召寄む。其小物器さす。意を
慰いんとす。母夫人は。是は。御心慰なり。王宮。其言
奏し。浄飯王の理小思召星光臣小申す。月御雲容乃中。年才有
息男代擇せし。即ち十三人を擇出して。太子の宮中へ進せり。太子大小

悦む世に其童子亦を御前小聚。昼夜種々の物語をさきく。童子見童門
 八真なる事小思ひ己が隨思見聞事。城虚誕しり。さきく。童子始
 々。太子唯出離の師を需入る。方便なれども。つげ小出る。吏を問ひ。自
 然世子。洩る。宮中。成。潜。出。る。妨。小。成。ん。不。如。吏。小。托。く。其。緒。を。曳。出。る。小。八。そ
 さあ。ぬ。休。め。く。衆。重。小。對。仰。多。い。ふ。你。達。天。地。の。間。小。住。る。の。生。く。生。る。者
 也。皆。九。が。如。く。心。々。小。友。を。聚。遊。中。を。仰。出。れ。ま。い。一。人。の。童。賢。が。ら。く。中。や。う
 さん。皆。ま。れ。く。の。友。成。得。く。遊。い。たり。然。れ。も。亦。品。を。易。事。の。先。龍。小。猪。虫。小
 一。緒。虫。と。舞。牙。を。な。す。と。麒麟。六。猪。畜。小。く。猪。畜。と。脚。踏。ま。す。と。狐。と。と
 中。然。れ。も。是。等。八。情。を。れ。者。を。れ。友。を。以。て。己。が。情。を。見。し。い。や。半。時。の。友
 を。離。れ。と。人。八。萬。物。の。靈。を。心。を。以。て。友。と。心。の。合。さ。る。友。と。せ。と。は。我。を
 あ。く。人。と。欲。す。心。其。友。を。な。る。所。と。古。聖。も。や。い。と。結。り。ぬ。然。れ。一。人。の。見。童。進。出
 會。歟。の。上。六。い。ち。も。形。を。以。て。友。と。事。を。論。たり。但。人。間。の。上。小。於。く。心。を

友とまする。吏信了。親子兄弟形容。似まも。心。寄。り。を。呪。他人。心。の。奇。死。人。ハ
 有。る。を。其。人。を。我。心。を。我。友。と。独。慰。む。者。有。ら。れ。や。と。難。ト。先
 の。童。子。曰。是。ハ。頑。小。也。さ。り。あ。く。心。を。人。の。上。六。論。り。吾。が。道。ある。人。乃。上
 を。論。い。たり。と。後。の。童。曰。其。道。と。如何。も。吏。や。言。の。序。小。承。り。あ。ん。と
 と。り。先。の。童。子。曰。吾。の。精。ハ。不。知。い。ち。也。及。ま。程。ハ。語。い。たり。を。世。上。道。と
 称。る。者。數。限。り。と。魚。先。文。道。筆。道。音。声。道。絲。竹。の。道。歌。舞。の。道。陰。陽。算
 數。天。文。地。理。或。ハ。弓。馬。軍。戰。の。道。其。余。ハ。枚。卒。小。遑。あ。く。是。等。ハ。是。技。藝。の
 道。な。れ。且。こ。ね。れ。真。の。道。と。号。ま。る。心。を。友。と。ま。る。道。め。く。所。謂。賢。道。明。道
 聖。道。の。三。道。なり。賢。道。と。謂。ハ。悲。心。報。謝。の。道。也。金。仙。の。修。も。所。明。道。と
 謂。ハ。明。始。驗。者。證。家。の。秘。吏。承。る。借。聖。道。と。仁。義。無。育。の。道。あり。國。土
 安。全。の。大。道。なり。此。三。道。の。ま。あ。く。由。学。究。一。人。を。真。乃。人。と。す。り。と。各。後。の。童
 又。曰。聖。道。ハ。世。小。有。吏。維。中。知。所。あり。唯。賢。道。明。道。と。は。道。を。不。知。る。何。國

ふひや答て曰我も往くはえんといふも或人の言ふに此國乃天門の當り行程一十三
 百里を滿す。檀特山の峯嶺より雪山医王ナ黎山吉龍院ヲ羅六伽陀山伽
 毘羅阿私屈陀般若山僧徒羅育陀金剛胎入と衆乃法の峯を以て見賢
 道無為の神仙心を友とて行きて住して亦鬼門の當り一千二百五十里の行
 程を滿阿育山阿松陀山喜羅々阿闍部妙見臺ア羅六伽羅優鉢羅山を以
 の靈山有皆是明始驗者乃行ひてを所なりと及ぶん是亦六百世の當り
 なるやと言給ふに後後の児童言曰お結り赤面して口を開き太子ハ
 始より二人の問答を居むひが。幾心修行の名山をすむひが。心中御喜悅限か。是
 去るが諸天九が誠心を憐れ此児童小純と語り及ぶること感慨しむひか
 するの跡を仰るは実の跡を物結をすもの。但一千三百余里乃行程陸
 路は海路やと向ふ先の童子曰五百里陸野道ゆく民家もいり五百
 里六谷川道と。或大河或は函谷や。漢夫山賤乃押されふ在るも思ふ難

路の。三百里山道ゆく尤嶮峭なり承り何心も結り多々太子とて
 たり。諸の往小難く是や出離の先達なりと心ひくお収むひ諸童子
 及びひひ。汝達の物結中く日表の許を晴しぬ今宵の夜も更なるを亦と未
 りと語り慰む。それ小賞衣を賜ひ脚の衣下されん。諸童子大悦
 び君恩を謝し宮中へ退出する

悉達太子出宮中赴檀特山

其後太子彼児童が問答を胸中お記し都城より天門の一千三百里彼方なる
 檀特山小分登幾心の師をもち年月の宿意を遂げし思召とも淨飯三の法
 令嚴し假初乃脚出遊小。數尋ハ官人前後を圍繞し夜四門の守衛國を
 心宮中へ潜出む使れ心かとも春と暮し秋と過巴お脚年十九歳は成
 せむひ多る太子頗小脚心苛ち斯く宮中お在る。何時成道の時有るは好
 上ハ又大王母夫人の貴意お背とも一度檀特山に到ん心強し思ふ維を

宮中を潜出せんと人々心を附く窺ひよ小智才小勝ま自操又類なれ。耶輸
 陀羅女小勝る人かれ。一夜更爾人定り。後太子耶輸陀羅女を御身近く招寄
 むひ。平日も馴じく御物語ありて。宿仰出され。一樹の蔭小宿り。何乃を
 成汲も一世の奇縁と増し。況九と御身と夫婦とをも更因位の契深れ。し
 かり。然も御身小丸が一大事成明。頼もた義あり。承引なれ。や不。曰。妃。色。正。
 是之改。仰。自。國。を。出。付。り。余。成。君。小。も。故。卿。乃。又。母。同。胞。を。成。も。願。ふ。と
 君。乃。御。為。た。く。し。焰。の。中。も。入。水。乃。底。も。赴。た。侍。を。何。更。小。丸。仰。を。背。ひ。と。ど
 冬。乃。太子。悦。む。を。其。赤。心。を。な。す。と。何。を。包。む。た。丸。小。普通。の。人。小。変。り。母。夫。人。乃
 胎。内。不。在。と。三。年。小。中。乃。萬。乃。吾。悩。を。な。せ。し。ま。り。と。出。産。乃。後。七。日。小。して。実。乃。母。君
 八。逃。去。ま。ぬ。坐。を。其。善。提。を。吊。ひ。且。二。切。衆。生。を。化。度。せ。ん。為。小。出家。学。道。乃。望。ま
 年。乃。坐。下。も。又。大。王。姨。夫。人。乃。慈。愛。示。れ。今。日。ま。く。黙。止。と。れ。と。丸。已。小。十九。才
 今。出。離。せ。し。て。何。時。を。期。と。し。た。依。て。今。宵。宮。中。を。潜。出。人。と。思。へ。り。御。身。潜。出。列

路。て。宮。門。成。開。丸。を。伴。ひ。出。し。思。今。仰。を。れ。妃。乃。胸。塞。り。御。望。あ。れ。を
 こそ。先。頃。御。母。夫。人。の。微。細。と。教。訓。し。し。此。身。乃。浮。沈。此。時。を。太子。乃。御。心。小
 後。を。御。母。乃。御。恨。を。受。人。母。公。の。恨。を。受。と。と。れ。を。太子。乃。御。心。小。背。く。小。至。る。是。ハ
 如何。せ。ま。し。思。困。し。雨。乃。眼。より。湧。出。る。泪。泉。の。如。何。と。言。人。約。ふ。乃。只。平。伏。し。泣
 居。か。し。太子。女。乃。氣。色。を。損。し。以。是。ハ。言。甲。斐。乃。心。小。此。宮。中。小。丸。乃。言。を。背
 ち。た。者。ハ。御。身。乃。と。思。む。と。と。る。一。大。事。を。告。げ。れ。其。を。猶。承。引。と。あ。む。七。百
 生。の。契。を。断。丸。自。出。る。と。突。然。と。起。り。成。妃。急。小。抑。面。是。ハ。如何。乃。御
 更。と。名。誓。言。を。り。約。を。争。う。背。ひ。な。れ。遮。莫。此。宮。中。小。衆。乃。新。宮。小。備。り。ハ。名。の
 中。一。度。も。食。成。も。小。か。づ。ま。ひ。か。つ。と。今。飽。ぬ。別。を。り。も。も。と。小。御。又。大。王。御。母。君。乃
 向。む。久。何。と。言。く。と。も。な。く。潜。出。ま。ひ。成。知。し。も。も。い。ま。も。向。を。責。恨。せ。し。た
 と。お。の。ち。有。く。甲。斐。乃。死。玉。の。緒。の。絶。ぬ。ぞ。な。れ。恨。を。れ。と。亦。伏。沈。く。と。と。位。せ。し
 太子。中。其。心。中。を。察。し。や。り。か。ひ。御。衣。の。袖。を。沾。し。か。ひ。も。ろ。が。右。乃。手。の。風。指。中。に。妃。乃

懐を指ひさか深く歎かひと丸御身と枕席八交されども今日より三年の後必
 然男子を産せし丸我心修行のうちに自然死去するも遺孤と母の慈育を長
 物結を人小せせく覚られぬ悔も更甲斐有まじ早くと忙を申すは
 唯夢小夢人一心地かゝる是非の事と云ふを聞かざる浄飯王と云ふ
 命の何所の脈を聞かぬ其たも音官中宮外かゝる音官中宮外かゝる
 此夜小限り此の音のせざる不測なりとも太子の妃の教導小隨の殿裡
 を潜出する女官女童を顧みず或は樂言小倚卧或は網度小これ熟睡せし形
 飾小紅彩を以て薫らるる香草成ひせのをかれを最浅猿と申すは
 幸しく官外かゝる出かひ耶偷陀羅女を顧て曰く偕老の契是かゝる丸修行
 の功を積正覺成道せむ再び相見の期あるれども老女不定の世界夫を豫期
 難し丸小く母夫人小能仕(孝貞忘り更更かれも早立出んと志す)

妃忙し御衣の袖小を著君御一人何國(行)るを劍山刀樹の竟まくも自
 成伴ひかゝる口絶絶も入る迄も太子首を振かひ執着無明の扉大宅小苗
 て我心を焦せり信心の安樂を出るの劍煩惱の絆を断り淨利小到る
 歎かす入り疾宮中か回り夜明後丸か行方を人問唯あつと云ふは心
 強袖を拂ふは妃猶も泣く故ちかかれを羅殺の御袖と列衣は妃の
 手小たり太子の扉を引く其まに既小到りも妃の片袖を身小添へ声
 立ど泣かひか斯く果を更かね泣き起上り局々の命をとりぬ
 鎖固自の国小入只紅洞小れ心の内を痛くする斯く太子の既小到りも車
 匿(太子の馬)や在と呼ぶ其脚声車匿が耳小雷霆の如くはえんと云ふ其
 起出太子が足もり大の強死更小所を志すと太子車匿小對かひ丸か上首
 あきと捷歩を曳と白車匿培發た時今深夜も出遊しあつたは手將
 亦四竟太平無事か逆敵の寄るふゆを何の科か御馬を召さしやと怕る



く難なる太子氣を苛ゆ小賢吏を中者か你とて無常の殺鬼女
来る更速なり丸一切衆生乃為小是を降伏せんを由り是を言ふ
捷歩太子のを率出せよと責む車匿猶も首を振大王の勅り太子
夜中お出遊せんせむ鳥將軍小給へ其後禁門守衛の官人小共
此言お背く者八罪九族を夷せん厳しく命し先鳥將軍小達し後
御馬をもちるを敢て承引む太子甚く憤りお尚馬を率いとあ
丸煩惱の結賊を降伏し手始先你を殊を奪しと佩ゆ室劍小御手成け
お車匿戰栗し叫ぶ守衛の兵を呼んお不側や一声お叫ぶ能く
お小於く已更を得んと寮の駒を牽出して進せたる太子色成和げお手
綱をゆるゆゆる乗せ率方りと喝令し車匿亦躊躇して曰君知るや大
王兼く太子の宮中を潜出む更成慮ゆ二道お命し城門乃開閉も度其
きる音成て四千里お書くすお道し且數多し監卒を置し時をりお守せ

お争ふ賑く出せられと太子是を言ひて天を仰く長敷しお意呼丸志
願お到り空しくあやと白と等し空中お淨居佛より緒の善垂来降しお
神通力を以て城の北門を開けお固く大門已と開れ此由一点の音おせ
監卒亦熟睡して不知茲お於く太子歡喜踊躍しお車匿を屬して城外へ
城門を閉じお如く用たり太子の宮殿を顧み獅子吼し誓て曰く我若し
生老病死憂愁苦惱不還宮又復不能轉於法輪要不与王相見若當不
思愛之情終不還見母夫人及耶輸陀羅女と斯く誓言を三年任期し
金殿王樓を捨思愛乃又母妻妾亦不顧約をせややく摺特の率し領を
望み地おそのは何の為ぞや唯一切衆生乃煩惱を救ひ極淨土に接せ
との大慈願かり難有る御幾心お有る然も緒天の感應まり太子
御馬の前お持國是間增長廣目乃四天王先班し惡人の障礙をし其
他羅刹天風天火天水地陽天金剛明王梵天帝釈迦羅密淨光天飛行無辺自

大迦陀國迦毘羅城乃王淨飯王乃息男悉達乃一度發心修行乃大願を發し
宮中を潛出當山來まり願くハ神仙丸が微志を憐れ檀特山乃行程を指示し
仰々小仙翁冷笑して曰你主六健氣なれとも五逆罪乃身成せ争う檀特法嶺に到
る乃太子曰丸生より以來生靈を殺む人畜困む神仙何ぞ五逆乃罪人といふ
と陳し小仙翁培怒して曰你母乃胎内にお在り三年行住座卧小苦患を与ると無量
なり加之降誕し母を殺し刺ハ大恩乃父乃意小背れ慈育乃繼母を舎三人の初
宮三千乃女官四門護衛乃監率小いささか怠慢乃科を及せり是十惡にも五逆に
も譬言するれ大惡人なり且其身小纏る衣服億萬乃蚕を者殺せり糸とし織し
木生草を括し漆なりたる不淨乃衣瑤珞玉帶ハ盡く人力を疲勞せしめ造り後
たる汚穢乃具なり奈何を衣鉢にも汚るも你無上正覺乃靈場小到る事を得た
も眞実發心修行乃志あり誠悔滅罪して不淨の衣帶脱捨從者を追ふて
檀特に到り荒らふ云う身を翻して森林乃中へ入る太子仙人乃穢をばす

悟かハ車匿を顧て曰你九か劫を背を宮中成扶出是れ後來する志あり
神妙なり然れも今更かく仙家の法令われは你是より馬成牽て回しつゝ佩
七宝の劍を解頂上宝冠を脱髻中の名珠を把り授け此三品ハ大王小獻し
告須彌山より高れ大恩を捨出家得道しこそ不孝の罪大いなり母ハ耶夫
人解脫乃為且一切衆生老病死の四苦を救ふ為なれ有させん謝し
よと亦瑤珞を解御衣玉帶を解て曰此瑤珞ハ今の母公小獻り多年慈愛の
深恩を謝し丸が正覺成道し都城小還り再び見せんとす乃遺物小見せし
よ亦此表衣玉帶ハ耶陀羅衣と丸が更を念とせんと又王母夫人小孝行を
しりゆへとやと悉く遺物をこころ遺言成託しよハ車匿ハ路上小泣伏し言成
悲發得ざりし涙を拭く太子小對以下官君の御幼稚より仕せり却出
遊び小室羣小添龍馬を牽り千余里乃當山より隨從し今更事成所
小捨ちりて回りのを俯願くハ發心の御望を斷都城還幸あり大王ハ

太子の行方を伺ふ。妃自ら導たせり。更かれども今更明白にお告ぐ。面を赤く
 せし。八妻夜に寝殿を入り。四方を物懸け。進む。何是の書。面を赤く
 せし。仰言あり。御前を去り。書車の中を尋ね。幸して探出。鞆にひし。か
 丸。此書の中不就て考る事あり。退して後刺され。目より。退して寝殿の床の間
 不待ひ。平日ありて。睡萌。我を。夢を結て。宮中に出。事を知。侍。心。罪
 謝。も。人言の。罪。の。速。刑。を。大。王。歎。息。し。新。宮。妹。女。が。恨。慢
 乃。罪。誣。も。金。是。云。甲。斐。か。れ。女。重。かり。四。門。乃。監。卒。何。い。そ。太子。が。深。夜。お。出。と。知
 ざり。多。と。鳥。將。軍。を。殺。し。嚴。く。結。向。さ。せ。四。門。守。後。の。者。も。恐。ま。入。前。夜。お。限
 睡。眠。萌。て。堪。え。思。を。守。後。を。忘。り。八。臣。が。逃。す。此。上。何。か。嚴。糾。お
 行。を。お。へ。か。さ。つ。か。や。す。鳥。將。軍。を。と。む。此。旨。奏。し。浄。飯。王。お。恨。果。お
 此。上。八。羅。又。追。兵。を。向。す。二十。萬。乃。馬。軍。を。東。西。南。北。四。道。お。分。ち。太子。乃。御。行。方
 を。尋。ね。し。此。更。も。民間。未。も。先。老。若。男。女。大。小。殺。た。食。を。忘。し。業。と

捨。四。方。お。奔。走。し。泣。叫。声。四。境。お。響。る。許。り。斯。く。數。百。過。り。東。南。西。三。方。乃。追。兵。を
 手。お。空。し。て。回。り。多。し。北。方。向。ひ。兵。車。匿。し。捷。陁。を。牽。き。回。り。王。宮。の。廣。庭。お。曳。居。て
 云。々。の。首。を。奏。達。し。浄。飯。王。車。匿。を。見。し。逆。鱗。は。く。如何。や。你。無。く。朕。が。命。を。一
 法令。を。守。と。太子。を。て。域。中。を。潛。出。し。今。何。の。顔。有。て。主。を。馬。を。牽。き。回。り。こ
 る。其。罪。牛。裂。す。も。飽。し。も。太子。何。國。へ。去。せ。速。お。行。方。お。告。ぐ。と
 責。ま。車。匿。恐。ろ。奏。し。下。官。前。乃。夜。熟。睡。し。深。夜。呼。覚。し。告。あ。つ。雷
 霆。乃。如。く。維。中。へ。起。出。し。心。を。思。ひ。太子。や。渡。せ。か。疾。捷。陁。を。牽。き。こ
 目。下。官。最。不。審。問。深。夜。お。御。出。遊。乃。因。り。將。又。太平。無。敵。を。征。伐。し。之
 逆。徒。を。い。さ。し。何。の。科。ふ。御。馬。を。召。れ。と。難。し。い。太子。曰。く。何。ん
 とも。無。常。乃。殺。鬼。責。來。る。速。かり。九。切。衆。生。乃。為。小。是。を。降。伏。せん。と。早。く
 馬。を。牽。き。責。ま。下。官。尚。も。大王。乃。法令。乃。嚴。か。る。を。鳥。將。軍。お。通。達
 せ。後。御。馬。を。し。ん。と。敢。て。省。む。と。十。計。尽。く。守。後。乃。監。卒。を。呼

人為聲をよき叫んくいひも。声出されむ止く成得ぞ。寮の御馬を曳出して進
しりふ太子早く馬召ま後不續と仰り乗出む百未ふ似む捷陵一
声も嘶ぞ。喜も鈴も敢く鳴ど。大地を踏車いと龍馬の蹄も只空とむ
歩む如くふひた尚をゆるも不側り。兼く閑閑乃音千里の外ふ善く城
門已と閑閑をやの音もせとせり馬も下官もきて急ぐもはな夜の明
る頃ふ一塵の塵山お着以後不承り心此都城より雲おあろ。一千三百里の
行程を隔。檀特山の端山乃上。是凡更ふいと。諸天の威神力も太子を送り
むひふこと。恐多く奏しをれむ大王も。后宮新宮諸御ま。半八信川半八疑ひ
只黙然も許たり。稍有く日光臣車匿お向ひ你太子も随従。遠境に到る
可く捨置とん。鈍々と回り来ると咎む答て曰さ入件乃雲山に到りいふ
仙翁仙童も。出来り此山俗跡凡夫来る所ならむ疾を回ると喝いふも
太子敢て唇もむと。密劍王冠髻中の珠を解く。曰く此三品大王お献り九が字

道成就。再び龍顔を拜し。遺物も見むと奏し。不孝の罪を謝し。もま
よく仰せ又瑤瑠御衣玉帯を解む。瑤瑠は母夫人なり。是も不孝の程を謝し。身
表衣と玉帯。耶輸陀羅女遺物おとす。去去ん。下官御袖をひく。る
深山お争り。君成残しぬれも。願く八衆心の御望を捨て。王城へ回。王城も尚
還幸乃御心か。何國も召具し。再三再四願をれ。許し。おと。你強
く丸く意お背れ。我心修行乃妨成を。今今劍小伏く先を。己小密劍小手
を。し。事成得と領掌し。御別を告ぐ。面りい。尚の緒天乃如護。や馬
も下官も虚空を飛。一千三百余里を不日回。唯何更も天力お。罪を許
さむと。汝御遺物を捧ぐ。健陵も。膝を折。涙を流。悲し。橋曇
彌夫人耶輸陀羅女。車匿が物結を。遺物の品を。白小抑當。惜ま。泣か
し。並居る女官。緒臣も。俱小愁。涙を止。浄飯王。何と。思召。入。空。吐
成起。車匿其馬。是。紹車匿。是。何の科。御馬を。召。せ。

小つ心小つ紐リ頃の中幸得と月光臣大王小対以君今馬を召て何國へ御幸か
 と問も王を是云して宣く世上の親心貴も賤も子我思の者やある形魄く
 才拙れ子成小愛慈を以て増て況朕が太子三十二相八種好具足せし耳
 たる天文地理算數書目画舞楽弓馬射ハ陽春小達一智ハ古今小秀也男
 天下小敵方一然も今虎狼蛇蝎の極る深山幽谷小入道と修と豈是を
 他小忍小忍人や太子在るを博論王の位北斗を支る富も何小せん朕も其山小
 分登り太子と俱小道を修し艱難を致す此生を交向とるた方りと宣旨ある
 月光大臣色を正しく曰是ハ如何なる勅披や君此國を捨玉る惡慈賢王より連綿
 たる血脉断絶し博論王位他人の看と方り萬代の末も不徳の瘠を遺し
 臣熟考ハ小太子字道乃御望ある事一朝夕の義小ハいま故奈何とれ
 耶夫人御懐妊ハとれ相者ガヤセ勅文と以太子降誕乃阿三十四乃瑞應現し七步
 小獅吼の金言小も三世了達四弘誓願緒法塵内天上天下唯我独尊と曰

成奴も世榮を樂むも更明り且十九才小ハ色更追女色を親者小御
 出遊り路上小老病死乃相を示とる總て不測の更も今亦車匿の正
 を以て考れ城門已と開た千三百余里を平夜乃内小到り更諸天の擁護
 なる更疑ハ假令深山幽谷小住一更も猛獸毒蛇も害を加る更能ま俯て
 願ハ睿慮を著むハ太子乃御運を天小任し学道成就てかくせ更阿郎を
 待せむと約を竭して練る浄飯王其練奏ハ睿慮弛と以実汝ガ中所有理
 かり故夫今夢想と以是追乃奇更を考れハ太子ハ朕が子小朕が子
 真小佛菩薩乃再生なるを朕尚惡慕の念を禁むる更能ふと
 朕年已小老小臨難陀いま幼余小王位を讓るる者ハ是を奈何と
 月光曰難陀太子御幼推かれも聰明睿智かれハ太子小立更
 推す不可かりとづれ且大王いま義老一更小あ何とる睿慮を煩ハ
 日星光とら小種々練奏一更も素り賢明乃浄飯王臣下の練



阿羅多仙人
悉達太子
服半懲之圖

尺地圖書卷三

〇三十三



尺地圖書卷三

身命を抛ち阿羅々仙仕へ、檀持法也、須臾苦行、翌々三年乃月日を送
却ふも、是何乃為之や。御身乃、采花を求む、あやあらざる不老不死乃長壽と
望む、あやあらざる未世乃、衆生を利益す、人の大慈願の、最難有、御身乃、

悉達太子於般、百星師伽羅々仙

斯、或阿羅々仙太子、對ひ、此三年、間、晝夜、乃修行、懈怠、なれ、よ、五濁
乃垢、去、五逆、乃罪、も、消、す。実母、六耶夫人、得、脱、し。上、界、乃、仙、女、と、産、ま、る、遂、に、帝
釋、天、乃、后、妃、も、備、る、ぞ、一、你、正、覺、成、道、乃、後、自、然、相、見、も、期、有、か、人、地、上、上、無、定
乃、室、般、若、法、其、至、到、り。伽羅々仙、を、師、と、す。無、為、子、道、乃、秘、訣、を、字、究、ひ、て、精、く
教、導、有、れ、む。太子、欣、悦、し、勝、つ、と、年、未、乃、高、恩、を、謝、し。別、を、告、ぐ、檀、持、を、至
出、む、以、般、若、其、至、入、公、登、り、却、ち、伽羅々仙、無、く、是、を、知、ず、途、小、出、迎、し、照、普、比、丘、ま、
る、更、何、を、還、や、と、呼、び、を、り、太子、疑、心、を、吐、く、跪、き、仙、師、の、足、を、礼、し、諸、ハ、伽羅々
仙、も、一、日、も、七、日、も、願、く、ハ、無、為、正、覺、乃、妙、道、を、教、授、せ、ま、む、と、曰、ひ、を、れ、伽羅

々仙、白、你、照、普、我、が、此、道、場、の、戒、行、ハ、顯、密、秘、密、清、淨、密、と、く、三、密、瑜、伽、乃、修
行、中、く、言、語、不、及、妙、典、な、れ、む、甚、く、行、ひ、安、く、も、汝、も、行、ひ、く、る、や、否、や、と、問、
太子、拜、伏、し、玉、ひ、弟、子、法、味、を、甘、介、く、世、栄、を、欲、せ、む、無、為、学、道、の、為、小、の、
身、命、を、抛、ち、何、を、難、行、成、り、修、一、い、と、答、む、伽羅々仙、善、哉、と、賞、し、室、の
伴、ひ、照、普、を、改、め、妙、舍、利、仙、と、呼、ぶ、緑、乃、脚、髮、を、剃、り、藤、の、太、布、の、法、衣、と、与、へ
諸、教、を、曰、此、所、乃、修、行、ハ、因、位、果、位、三、昧、と、く、三、品、乃、行、ひ、有、亦、虚、空、無、為、濕、婆、無
為、真、如、無、為、と、く、三、無、為、乃、行、ひ、あり、亦、不、變、真、如、實、相、真、如、隨、緣、真、如、と、て、三
真、如、乃、行、ひ、あり、上、三、々、九、品、乃、修、行、不、可、説、不、可、得、の、心、地、不、も、其、修、行、最、難、
仙、食、ハ、阿、室、蘭、樹、乃、菓、木、檀、子、と、号、も、る、者、を、一、日、一、粒、服、し、一、滴、乃、水、飲、む、と
成、修、と、此、峯、乃、巽、乃、方、三、里、彼、方、小、從、尊、山、嶺、を、大、伽、遮、那、山、と、号、其、山、小、雷、泉
あり、妙、法、泉、と、云、り、其、滝、乃、源、小、金、剛、室、石、と、号、平、か、る、石、あり、を、坐、禪、乃、林
一、く、一、百、日、坐、し、乃、修、行、敢、く、起、し、成、修、と、一、百、日、坐、て、の、修、行、敢、く、坐、と、す、更

を許さむ。二百日伏ての修行敢て睡眠を許さむ。行乃内小思念なり。行乃内小言結
た。行乃内小心なり。是自然不生乃行相なり。慎で怠るまされと指示と太子師
命を領掌す。大伽遮耶山小攀登り。滝乃源を尋く。金剛宝石の上小到り。三密
乃行入。痛くひく日小木檀子一粒の他。水を飲む。飲む。白玉乃
御肌。日小黒。風小荒。唯枯木の。瘦衰をひかり。三伏乃其の日も冬暑
成忍く。苦行。嚴冬の雪乃夜も寒。苦を堪。難行怠。精神を厲。行
をぬ。ひく。余りの困行。身軀倦疲。思。睡眠を催。ひく。何國よ
王と申。二人乃天童。睡居。太子を。曰。是なる汝。法衣を身。經
ひ坐。牀不在。無明乃睡。魔小犯。戒行を破。是法賊。い
や縛。人乃小。太子の。手。強。縛。太子。覺
か。猶。深。人。月。居。小。繩。端。傍。枯木の枝
か。上。下。其。度。太子。腕。折。痛。堪。絶。死。天

童水。灑。亦。河。責。吏。前。信。太子。余。の。苦。小。声。を。殺。て
身。の。罪。を。懺。悔。せ。思。召。多。亦。思。不。師。乃。戒。行。中。言。を。殺。さ。る。吏
成。禁。む。む。可。む。法。乃。為。小。責。殺。何。を。露。の。命。小。惜。ぞ。ん。こ
猶。も。責。苦。成。心。ひ。て。を。あり。ま。と。天。童。相。り。て。曰。此。汝。彌。是。法。賊。小。あ。ま。と。真。の
修行者。乃。今。縛。を。免。得。ま。る。樹。上。乃。鉤。也。繩。を。解。坐。導。の
牀。小。置。進。せ。何。國。も。なく。去。ま。り。太子。幼。て。悟。ひ。是。緒。天。乃。解。意。を。戒。む。小
小。こ。と。天。童。乃。後。を。礼。拜。あり。倍。精。心。を。厲。難。行。苦。行。三。年。小。及
なり。伽。羅。々。仙。太子。乃。勇。猛。修行。を。乃。く。續。歎。你。已。小。信。心。堅。固。小。戒。行。せ。り。此。上。ハ
雪山。小。到。り。毘。羅。梵。志。仙。師。陀。羅。大。師。耶。仙。二人。乃。道。師。小。事。く。正。覺。成。道。せ。你
小。此。二。善。乃。授。を。法。論。室。錫。杖。妓。真。乃。伽。薩。如。意。を。授。鏡。曰。此。錫。杖。乃
解。化。衆。生。乃。功。德。を。こ。め。是。を。策。と。た。毒。蛇。惡。獸。害。加。と。緒。由。音。を。告。く。道。く
避。を。足。下。小。殺。生。戒。を。破。む。如。意。小。神。刀。自。在。の。法。善。乃。く。虛。空。飛。行。の。功。乃。り

是より雪山赴く小廣野道谷川道山頭道とく種々の難道より信力堅固より
到りしに教示され太子歡喜斜に師恩を謝して雪山赴むはり
天女靈鬼告因位之善惡應報

斯く太子ハ伽羅々仙小別々左不如意を把右小錫杖をけり鳴く廣野道と徑
あふ密言の功德あり躰健小足狂く昔の苦をこぞ駿馬の走るより疾己の右手
乃路を過ゆ所小忽然南方より黒煙渦巻来り焰頻小燃之上漸々小近きき
小何妻やんと傳多入小炎の中より無數の餓鬼顯出たり其形黒瘦く
枯木の枝乃如く骨を露し腹の之大い小て眼色憔悴し々るが太子を拜して懇哀の
言を出し附事有が如く太子憐れむ以一念不生罪福無主本来空無我諸法実
相一切有為法如夢幻泡影如露亦如電應作如是觀と唱ふ心不測也猛火急然
と消く五色の祥雲と變り無數の餓鬼と見え々るも端嚴微妙の天人と現し當
来作佛口生佛果とい言小唱光を放く虚空よりたり太子ハ此瑞應を見大に歡

喜かひ猶も安成進む小一場の墓原小出む以いあ堆の墳の前小端嚴乃
天女香成焼花を供く礼拜し居り太子不思議小思召其故を問ふ小天女答
曰人ハ此所ハ彼方小茂る杜の中なる戸部伽耶乃市乃墓所より我身ハ或市人乃
子中いひい三年前小死去い曾く紫在り三室小供養一六親小孝順乃
眷族を惠み憐れむ其福力依り上天乃樂界小生を受緒乃樂を極め是を
前生乃善心乃を所を此古墳乃下なる因位乃形小香花を供ひたりと答
太子忠告く感歎しむ其所を過往ゆ所小亦堆の古墳乃前小頭の惡鬼在
り墳を發れ土乃荒し古骨を取出し眼を瞋し焰を吐けしは嚙碎れ亦探り
しむ推れ居り太子見む以你何れんは西葉をたると問ふ惡鬼泣て
答く曰我ハ前生ハ部伽耶乃市人なり生得愚痴邪惡して人の盛たるハ妬
人の衰るハ悔り親ハ疎疎を欺り其惡報小依り今生くる鬼畜田の主と
受日夜緒乃苦患をふむるは因位の枯骨の恨り斯のく墳を發れ骨

我碎たけりてとる太子嗟歎しむ善悪應報の速なること如斯恐るるごとく
金剛合掌しむの生死去来即是如夢諸法徒本未常自寂滅相故以善惡不
二邪正一如自然真無為と唱へ大伽薩如意を一度揮かへ光明虚空不
靈鬼も天女も歡喜し太子を礼拜し光と俱に飛去り斯く太子其所か
道なき忘れたる程小稍雪山の中近きと覺く山頭氷凍白刃乃如満山雪埋
まると銀世界も細きを寒風肌骨徹り冷氣皮肉を裂むりかたむ殆ど
ひく女内樹下小停立し少く天の淨居佛太子の心を厲さんと一人の樵夫とかり
椎柴を擔ひききりて太子悦び如何山人は雪山に赴く修行者も
あまり乃大雪小前後を弁せ何年雪山に登るる路を教てと仰る樵
夫笑ひ曰不惜身命の沙門とく是なるの雪小何を往煩や此山六緒天擁護
の嶺小光秘事の若乃道緒佛正覚の臺かり三の峯跡高く微妙
不斷の法を示しと沙跡とや金剛力乃方便の擊も更小動も更か長

夜の燈かりと魚己身の月明を雪を正の光れ魚鱗ハ氷成るる挿と挿し
餓鬼ハ氷を足く燭と天人ハ氷を足く瑠璃と人間ハ氷を足く水と是成曲見
不同と謂り其如く此雪也外道ハ寒た雪吹とく手足凍五臓と惡魔ハ刀劍
とく魂を消し心成恐む佛菩薩ハ法の英とく下化衆生乃慈念成無
是成法地乃三見と謂り属や修行者と雪吹おまされ失れを太子忽し悟
むハ大伽薩如意成揚く虚空を指業雲無碍如虚空本虚隨想大伽薩
行と觀む身の光り忽し身軀の凍忘られ行歩心の隨ふり溪を超き
を攀遂小雪山の法臺たる者も脚數ハ限り

耶輸陀羅女生若宮

却説大伽陀國伽毘羅城ハ太子出塵の後も海飯王橋曇彌夫人其他
新言女官百司百官下萬民皆思本結本怨の洞小袖成括る人か中
ゆゑて哀まふ痛ハた耶輸陀羅女の御身の上かり太子別離小臨其懐と措

三年の後丸が種を生ざし、仰るも別離の怨ふすれはるげの更と思は
 ころふ二年平冬乃頃より何となく心地例をうと目も増胎内小物あり如く寛ひり
 心を困むおへとも人小云ふともよも穢くせと深く包隠しおははけても太子
 の御事成忘る遺物の御衣と彼片袖を身お添へ唯帳内小引籠り世成身物
 不敷たらしむらち衛々小御腹ぬらふ方うと包とを女官童女亦是成知其所
 彼所お寄ごらんひも絡合をるる。太子宫中を出入りし已小許まの月日成り
 ばふおかく重れ身おなりお何者おかづまひ如何なる草の種やうん只ふまけおけ
 お云ふと思ふは此道おことと暗言やふ此まを月景城おこれり。耶輸陀羅女
 密男あり。此頃孕おひり。其主ハ維く集く云觸。果ハ橋曇彌夫人のけ健
 是ハ異の風貌の自然大王の眷中不達し御不審を蒙るを何と陳とて心
 強だお入。耶輸陀羅女の新宮小到おひ人を拂ひく密懐妊の虚実を糾しお妃を
 只顔お紅染。うむらるる各まを包むとれ甲斐方と斯とる一宮へ入る

何かく隠しおる太子の宮中成出ま。以前幾心修行の望あると成結おひ久
 しくまとして宮中成潜出たり丸があらう人後ハ又大王母夫人ふりり事よと教訓し
 右手の指おくまを懐を指おひ三年の後孕くと自ら男子を産る。是丸が遺子
 かれを慈育と仰るも只御別の怨し小穢くハ思もらむと口唇お出離の御望
 成止りしれいも遂小結おひて宮中成潜出させおひぬ其後ハ深丸歎たおれぬ。其
 御事お忘る侍小年月とく心地例をうと目も増く身重かりとておれおね憂
 名とて呼まぬる身の怨も推量せむと結り身成お伏し後ハ橋曇彌夫人のけ健
 奇異の思をかり手信ハ疑ひとら其より奏せとて自ら乃御坐お聞かせ
 玉ひ鳥將軍乃妻成孕。耶輸陀羅女物結の中。妊娠の更を奏せむとて淨飯王
 綏り玉ひ太女推者あり未生以前より衆の奇特おれをさる不測乃更絶
 とハ云難なるも三年の月日揚る妊娠とて更疑ひたおれ宮中へ出入るも男の子
 を来心く結問とて命し玉ひ鳥將軍乃妻王命を領掌しとて回り大人お斯

と達しんれど耶輸陀羅女仕る女官がら三新宮仕る者を一人は召寄り同乳
 玉余物弁ぬ女のなほ己が隨思より言成中おる実言とも虚言とも紛れ
 今もさうせんとなきて捨置きたる小逐小臨産の時より玉乃如た男子降誕
 羅睺羅尊者と此君君なり太子世小在る室位瓜受耐まひの御子たつて満朝
 乃百官緒乃王より慶賀の使者門前市をなるとたれ難有て是成祝する者を
 却て種々小紛纏しる小を耶輸陀羅女の心くさ磔言なり世成あれたる物小思
 ひ弥引筆り居る心ひとら小若君を太子の御遺子と撫傳憂か中なる樂草小
 生しまふ也他の人へも思ふと至ふと捨種と無下小見ゆはやく紡
 来る人中たれやうふありとてた世小云甲斐なく明し暮しあふもあはれ此君君の成
 長しむる母子を連いふる深山幽谷なれ尋ね一度太子小見しあふもあはれとせしむる
 よもふあはれな月日を送りまふ御心根を痛りうるま

悉達太子若行雪山降魔軍

再鏡悉達太子嶮岨絶壁を徑く雪山乃法臺小安と看ふ所小一人乃異人樹下小
 端坐し妙舍利仙我你在待と久しと呼りぬ太子此人を見む心懸須髪垂く黄色小
 て兩眼乃光り明星乃如顔色薄紅なる木の葉を藤乃糸とて編綴たる法衣
 成穿ち手小條乃如意をとれり太子思ふは是必と禪羅梵志仙なるを
 袖に合せし礼拜しむ仙意の如く弟子ハ妙舍利小願くハ神仙無上正覺の教を
 示しむと曰仙翁曰善哉妙舍利我を禪羅梵志方り抑此峯ハ諸天守護乃聖
 地也東ハ九織本覺基西ハ法性妙覺基南ハ妙織等覺基以上を雪山乃三基と
 謂り不惜身命乃難行をなると常參多日中放參と一日三乃行あり遮那金
 剛部三昧般若蓮花部三昧寂靜佛部三昧と三業九品乃勤行一日中懈怠と
 るしん免さると室より臺まぐ十里乃行程あれ合せし二十里諸地室を号し北
 真禪定臺とりの朝不出く夕小此室まゝ回り後ハ石上小跏趺坐し定心淨心寂
 然心妙真心真無心此五定心を煉く緒天小飯命せよ今日より妙舍利を改し雪

山園利と叫ぶをたたり一点中怠慢の心を生じざるを要なれと教諭。隠れ、一塵
 空を去り去り太子其後を礼拜しむ。是より日々三葉九品乃勤行なり。
 三臺を行ひ廻り其道路悉く雪降積寒風乃厲し死喪天地を覆ふ。一
 日一日由白日を照らすことなり。氷凍る劍より中矢丸岩角を踏む。行廻り
 日々小甲里夜北臺小四り。坐禪乃牀小睡を凌ぎ終夜諸天小取命一動三葉
 火を焚され二滴の湯を求む使中なり。増て一粒の食もあらずと魚猪天諸佛
 乃守護小依て室小回む温まる香風吹きさる。脚身を温り食を断む。中
 氣満る餓小臨む。一心不乱行ひとる。てを焚く。小三十三天の中第六
 天小魔王在る。遠小下界を直下し。悉達太子乃雪山小在る。且夜を捨む。若
 行し。其心をよく。大い強た彼斯の。信力堅固かれ。久く。正覺を得
 たり。然るを必ず法輪を轉じ。切衆生を利益し。佛法世小熾小行。我れ。春
 族彼が為小困られ。遂小下道壞乱せんと。憂悶。樂まむ。此王小二人乃女有

長女小欲妃と。中女と悦彼と。小女女成快観と。二女又王乃憂愁乃色
 成ん。其故を問。魔王其本末を説せしむ。二女奇しく曰。又王憂め。更なる
 妻小三人下界下り。色香成。悉達を感。淫欲を。其戒行を妨む。人
 之王大悦。悦ひ此義甚。急死悉達を。命。二女領掌し
 王乃瑤珞を頂。天花を挿。五彩の衣服を著。飾り。妙香を。十二小遊の
 下界下り。夜中雪山の北臺小入。太子を礼拜し。曰。天帝君が。多年乃苦行を感
 ず。小上界の中。才智秀容。顔勝る者。を擇む。太子乃。薪水を扶。小妻亦
 三人其擇小抽。小茲小き。侍ると。媚を。含情を作。其声。頻伽鳥の。啼
 う。如。其顔芙蓉。露を。含。如何。石心鉄腸。乃者。香色。乃為
 小湯。太子。一点。心。動。自若。定心。を煉。小魔女
 猶。其行。を妨。二個。乃。玉。盆。小菓。を盛。成。太子。小捧。曰。是。六。天帝。脚。園。乃。掃。る。
 菓。を。食。する。者。百年。乃。齡。を保。十。菓。を。食。する。者。千。歳。乃。壽。を。延。る。仙。菓。也。

紺王大い小後死斯て八叶と此慶自身百千眷族を牽連し雪山降り
 北基小迫著く空鏡るる太子石上小端壁し身動も一玉を王左手小鐵
 大弓を握り右手小鉾う如た管前五條を手挽迅雷乃如丸惡舌を裁して曰
 達遣去の福力依り過淨飯王乃子と生なり何ぞ王位富貴を捨無益の魚
 道哉雷此山中小餓死せんとや早悟り出家法を捨故卿還り轉輪王と
 かん。采曜歡樂を極め又母妻子を安んじし猶迷をとり正覺を
 得んとせむ我此二箭小你が命を断るし你を也梵天帝釈諸天神とのを我が
 弓箭を番をんく魂を消し肝を落して怖惑り豈況你の於也只速去去と
 罵りぬ太子眼を用く見む其丈三文余小と雲小跋扈し兩眼赫々く日論
 乃たひ出さる如く鼻後尊る山小似し耳根まぐ裂るる只血池も溜る上下四
 十根の齒ハ劔を植りすと疑れ鬚髮悉く鐵針一般なり其後小百千の眷
 族衆ハ惡相統尽るると各眼を瞋し身を咬み善戒を弄し隨り太子怡然

度摩摩迦薩如意を以て虚空を履む梵天帝釈四天王を護
 法善神緒天將天龍八部小至るる一瞬乃爾来降し箭を放ち喊を發し軍小
 向小を大王大い狼狽身を翻し逃回れを殺る眷族も途を失く八方散乱し
 茲小於太子如意を收め天部諸將も天上と昇り是等小始りて全
 百般千般小方便を太子乃道心を妨ぐ計も太子乃石心動る更須彌山の如
 く信力堅固小して雪山小修行し更六年小を拜ひ

悉達太子得蜀偈正覺成道

太子雪山小昔行り已小六年乃星霜を徑するいま爵陀羅大師耶小見
 ぶがれ如何もて相見し正覺成道乃與義を究んと心中願む例の如く三臺
 を廻り法性乃峯小到る所小遠る溪底小虚空小響く大音也緒行無常是
 生滅法と唱り太子小悦は是平く無為成道乃要文なり是念唱者
 凡人なり。察する小爵陀羅仙乃冬一羊の拜錫せざるを以て雪を踏水を令

深溪乃底尋下りあふ唯見其丈二丈許なる悪鬼八面九足あつて眼中大
如く只紅蓮の池の如くなるが岩頭小腰歩け吐息喘の如し太子些も恐おざ悪
鬼不對曰即今乃二句の傷を唱へ你方る悪鬼答て曰然り太子曰猶あまりの傷
有や否や悪鬼曰猶二句乃傷あり太子曰然を我も唱へせよ悪鬼曰往古同淳
提小大國の王あり名を脩樓威と号く富天下を保ち財宝を散く億兆の民を
撫育し然も只是二世の仁恵あり久遠の思ふあふる故歎た正覚乃法を説きた
導師を求む毘沙門天王其心を察し化して夜刃となり緒乃悪相を現し彼王宮の
門小到り王の爲ふ正覚の法を説くと呼ぶ大王歡喜し殿上小結し法を授くと望
まふ夜刃曰我今甚と餓なり王乃軍愛の後妃を以皇子を我も食ふと食ふ
能王の爲ふ妙法を説入王皇を拜結し即ち最愛の夫人を以皇子を召出さ
夜刃小与夜刃即時王の妻子を裂喰ひ而後正覚乃法を説くと其如く我も
腹中餓なり你我も食をよむ残りの二句を唱へすと太子曰你今如何なる食を

欲もろや悪鬼曰我唯人の肉を欲を你残る二句の文を授くと欲せむ我が口
中小入く食とせし法を我も魂魄小唱く法をぞ太子飲せしとて曰他の
命を借る自乃命は副吏あり他必く自方り自乃命を貸し他の命と副
とあり自必く他方り自他一如と悟る何れ命を惜むをたんと身を躍て悪
鬼乃口中飛入むを不思議や悪鬼が口裡の利齒忽ち八葉の蓮花と化し安
坐せしなり生滅を已寂滅為樂と唱へ今ま悪鬼と口をえりるも忽ち
雲小従耳る毘盧遮耶佛と現し太子を掌中小居く法性室其至小授しなり滅之
我ハ悪鬼おあふと爾陀羅尸師耶也。本来ハ毘盧舍耶佛なり御身前後十
二年の飛行怠りおはる小依る今已正覚成就せり早く世を出て天人俱利
益しとて合掌礼拜しむる會率小虚空小音楽をえ五彩の花降し十方三
世の諸佛三身五智七佛其他五十二菩薩緒天善神梵天帝釈四天王天龍八
部小至るまじく空中小遍滿し合掌悦しは異口同音小三界六道乃教主十



八百九足の靈魁

悉達太子之試之罰の傷を授る圖



方最勝光明無量三学無碍億々衆生平等引導の能化南無釈迦牟尼
如来本師本佛と唱へ是より悉達太子を世尊釋迦牟尼如来と八十有り
たり。然れども多年脚望の如く。正覚成道して三十二相八十種好の脚姿金光を放
ち十方世界を照し。五六十方世界より光明照して十神力を現し。衆生引導
直指成佛道の本願を元々せしむを難有た斯く釋尊八真如法性妙覺堂
乃上より三三六通を具足し。三千世界過去未來現世の三世を徹し。是
より彼衆生に彼より是を生し。善悪の應報を隨ひ。人間天上地獄修羅餓鬼畜
生乃至六道の流轉し。死生の苦海に沈淪し。十二因縁の受。触。六入。名色。觸行。无明。
以上十二の因縁を愛。永く覺を我と緒の苦悩を愛するを隣とす。此の神力方便を以て廣
く一切衆生の此煩惱を救へ。それ三畏衆生。八皆我の子なり。衆生入地獄我入地獄
衆生出地獄我出地獄衆生苦惱我苦惱衆生安樂我安樂と大慈愍心を發
し。此十二年の星霜を徑く。頃十二月八日。曉の明星を戴た初て雪山を立出づ。

世小出山の釈迦唱と寫し。此時の脚姿なり

三迦葉師釋尊

斯く釈尊の雪山を出づ。波羅那國に到り。小女一餓。小臨と云ふ。大の淨居佛
是を察し。化して道士となり。跋利村と云ふ。里小到り。主人小智と云ふ。曰。大迦陀國淨飯王
乃太子悉達。我此修行の爲。小身命を抛し。十二年。今已正覚成就し。一切衆生
を濟度せん。願。這里を過す。你亦供養し。なり。無量の幸福を得。此淨
居に。主人悦び。密教を綱。待居。り。多小程。を。世尊。き。せ。世。小。を。主人。是。を見
し。多小光明輝。威相。莊嚴。世。小。類。を。れ。歡喜。踊躍。佛。足。を。礼。拜。敬。密
教。を。獻。世。尊。怡。悦。此。ひ。か。受。受。小。善。を。れ。心中。念。ひ。去。り。過去。の。緒。佛。香
鐵鉢。を。以。て。食。を受。予。中。鉢。鉢。を。以。て。是。を受。人。と。如意。を。以。て。虚空。を。摩。入。天
上。より。四天王。各一鉢。を。捧。佛。前。降。り。來。世。尊。亦。念。む。予。一王。の。鉢。を受。か。を
殘。三王。本意。を。失。人。不如。四鉢。も。小。受。人。小。と。茲。小。於。四天王。の。鉢。を。悉く。受。四の。鉢

在掌乃上おの置お祈念ねん一ひと忽たち然に々り合あして一鉢はつとあり四よの重おも目のめ残のこりり諸土人の
 密教みつぎょうを受うむひ呪願じゆんして曰いく三寶さんぼう供養くじやう乃すなは絶た王おう當たう未まあらくハ安樂あんらく无む病びやう多た福ふく長ちやう壽じゆ
 来世らいぜあらくハ人ひと天てん小せう生せい下げ緒じゆ乃すなは快樂くわいらくを受う人ひと唱な密教みつぎょうを喫く一ひとかみ而を鉢はつを洗せん嗽そくして土
 人ひと二に飯いを授まふ二に曰い飯い依い佛ぶつ二に曰い飯い依い法ぽう三に曰い飯い依い僧そうと土人どじん亦また隨喜ずいきの泪なみだを流ながす恭敬くうけい
 礼拜らいはいして去さる斯かくく世尊せそんハ波羅ばら那な國こく鹿野ろくや死し於お於お四天王しつてんわう乃すなは為な四し結けつ乃すなは法ぽうを説とく
 法輪ぽうりんを轉てんすむひをりを鹿野ろくや死しを多たく摩竭まがつ國こくを過ありをふ日持ひもち小暮せうぼ人ひととをこれハ
 依よく優樓うろう頻螺ひんらかを終しゆうへを侍しやうく宿しゆくを乞こふ此優樓うろう頻螺ひんらといを六名ろくめいを加葉かとをいひく兄
 弟三人ていさんあり俱くハ仙道せんどうを學まびを大事だいじへ神通しんとう廣大くわいだいなる國王こわうとを禹民うみんとを宗敬そうけいと
 師し又また乃すなは如ごとく然かく加葉か心中しんちゆう天てん下げハ我われ勝かる者ものありと自負こころするハ一ひと文ぶん年ねん若わからば汝
 孫そん門もん不ふ傳でん二に宿しゆくを乞こ加葉か終しゆうて是こゝを迎むかへ入い對面たいめんとをふ三十二さんじふに相あ具ぐ足そくぞ好こう相あけられを
 是凡ぜはん人ひとたらしと思おもひ向むかひ曰いく你なんハ何國なにこくより何里なにり通とほる者ものなるや世尊せそん答こたへて曰いく我われハ六む伽か陀た國
 乃すなは庄淨じやうじやう飯い王わう乃すなは子こ悉しつ達たつなり曾そうく護心ごしん善提ぜんたいの道みちを求もとめ檀特だんとく雪山せつせん二山にさんハ難なん行ぎやうとを

二十二年じふににねん無む上じやう眞正しんじやう乃すなは道みちを得えり依よく普ふく四天下しつてんか成な廻まわりを一切いっけつ衆生しゆじやうを化くわ度だせんを
 欲よくとを然かく今いま日にち這里ぢやうり小せうく日にち成な尊そん者ものの大名だいめいを乞こ一ひと宿しゆくを需もとむハ乃すなは葉はからつを
 諸しよ公こう音おん小せう安あんえん一ひと淨じやう飯い王わう乃すなは子こ降かう誕たんの同どう諸しよ乃すなは瑞應ずいおん現げんしを學まびを諸般しよぱん乃すなは技ぎ不ふ通とほ達たつ
 せを一ひと悉しつ達たつなるやをも渠なほ世尊せそんを捨すてる善提ぜんたいを學まびを其その道みち迂う遠えんとを我われハ道みち乃すなは眞
 乃すなはハ不如ふごとく渠なほ行ぎやう力を試しみを世尊せそん小せう謂いく曰いく諸しよハ名な高たかた悉しつ達たつ太子たいし乃
 我われ脚きゃく身しん乃すなは雷らい名なを乞こ更さら々々六む縁えん熟じゆくしを相あ見けんするを何なに乃すなは幸さいく是こゝ不ふ遇ぐ人ひととを我われハ
 我われ諸しよ房ぼう悉しつく弟子だうし住ぢゆうく宿しゆく進しんむ小席せうせきなり唯ただ後園ごえんハ一字いちじ乃すなは石室せきしつあり最廣さいくわうく清
 淨じやうじやうなるも一難いちなんあり其故そのこゝろハ裡うちハ毒龍どくりゆう拙せつく稍しやうもを人ひとを害がいすを我われ是こゝを奈何なごとを心こゝろの隨ずい手て
 世尊せそん曰いく毒龍どくりゆう在ありを若わかくを其その石室せきしつを一夜いちや予よ借かむハ加葉か乃すなは曰いく厭いむを心こゝろの隨ずい手て
 宿しゆくハ乃すなは結けつ小せう乃すなは世尊せそん依いてを童子どうじ乃すなは引路いんろ小せう從じゆうハ彼か石室せきしつ小せう到たうり結跏けつが趺たふ坐ざして二
 世せ成な觀くわん下げ御坐ござを果はてを毒龍どくりゆう世尊せそんを害がいせん身みを搏つかむ猛大もうだいを發はつす大指だうしを吐はく
 石室せきしつを燒や其その天てん乃すなは光天くわうてんを衝つく熾し然ぜんハ乃すなは加葉か乃すなは弟子だうし亦また遙ちやう小せう其その大光だいくわうを乃すなは大だい乃すなは

三葉尊
不願
の図



天竺國會卷三



三葉尊
釋尊
石室小宿也

天竺國會卷三

該死師小斯告多れ加葉室を出大光を足手を拍て笑て曰降る汝彌毒龍乃為
 小喜せしきぬと急小弟子小指揮し石室の辺り不到り水成流死大を消し
 消され其代捨置り四りなり世尊猛大の我殺り来るも動し玉を端坐と安坐し
 小玉毒龍小對一喝し玉毒龍忽ち僅乃小蛇となり働く更熊も世尊是をうて鉄
 鉢乃裡小置三飯飯を授し斯く天明不及今加葉緒弟子を授り石室不到り玉小
 石室已小灰燼となれも世尊自若く在る加葉殺死脚身夜未毒龍の天を殺
 及足と今と問世尊微笑し玉毒龍大を殺し石室を燒し玉を焉と予が真正乃
 金剛鉢を燒し支を得入予毒龍を降伏し已小茲亦有と鉄鉢乃裡を指示し玉加
 葉大の小殺死此汝が神通悔ゆる然も我が道の真才も亦不如して別を告く本所
 小回世尊加葉我慢心を折し佛道小飯修せんと思召され其日留りて樹
 下小坐し終日座禪す夫一夜小至すと四天王来降りて世尊の說法を聽せある各王
 光明を放ち日月乃光りも挿明なれ加葉が弟子亦亦遙小是を足相續り曰什無

毒龍汝彌已小降伏し今宵亦火光ある何等乃光り人々師乃許小往り斯と
 告多れ加葉の初り弟子と俱小潛不到り窺小四天王来降りて說法を聽居むり俱
 弟子們の光明のそり其尊容を乃多更熊も加葉の親くんと歎息しおら猶
 飯伏の心なく本所小面世尊の彼が我起をて日小待りて停りぬと都く七日小
 至りぬ其夜も小梵天帝釈緒天緒菩薩天龍八部も来降りて說法を聽む
 小と母夜世尊の御坐の四面光明赫々り加葉の母夜小此奇特を見守り七日小至
 り初々慚愧後悔し悉達が神通廣大なること我が及ぶ更速しと慢心を退け二
 百五十人乃弟子と俱小世尊の前不到り恭敬礼拜して曰願く大知識我が輩を教導
 小と願をれ世尊善哉比丘と賞し玉髪を剃せ袈裟を著せ此們が為小羅漢法
 論を傳し玉是亦依加葉法眼淨を得阿羅漢果を得り此義を皮傳て加葉
 二人乃弟那提加葉伽南加葉の二百五十八人の弟子を率りて佛弟と各
 法眼淨を得阿羅漢果を得り

